

オプション教材ゼニゴケ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.

3.

4.

5.

ラテン語で *divide et impera* というのがある。英語に訳すると、*divide and rule* の義だという。すなわち「分けて制する」とでも邦訳すべきか。なんでも政治か軍事上の言葉らしい。相手になるものの勢力を分割して、その間に闘争を起こさしめ、それで弱まることを打って、屈服させるのである。ところが、この語は不思議に西洋思想や文化の特性を適切に表現している。分割は知性の性格である。まず主と客とをわけける。われと人、自分と世界、心と物、天と地、陰と陽、など、すべて分けることが知性である。主客の分別をつけないと、知識が成立せぬ。知るものと知られるもの——この二元性からわれらの知識が出てきて、それから次へ次へと発展してゆく。哲学も科学も、なにもかも、これから出る。個の世界、多の世界を見てゆくの、西洋思想の特徴である。それから、分けると、分けられたものの間に争いの起こるのは当然だ。すなわち、力の世界がそこから開けてくる。力とは勝負である。制するか制せられるかの、二元的世界である。高い山が自分の面前に突っ立っている、そうすると、その山に登りたいとの気が動く。いろいろと工夫して、その絶頂をきわめる。そうすると、山を征服したという。鳥のように大空を駆けまわりたいと考える。さんさんの計画を立てた後、とうとう鳥以上の飛行能力を発揮するようになり、大西洋などは一日で往復するようになった。大空を征服したと、その成功を祝う。近ごろはまた月の世界までへも飛ぶことを工夫している。何年かの後には、それも可能になろう。月も征服せられる日があるに相違ない。この征服欲が力、すなわち各種のインペリアルイズム（侵略主義）の実現となる。自由の一面にはこの性格が見られる。二元性を基底にもつ西洋思想には、もとより長所もあれば短所もある。個個特殊の具体的事物を一般化し、概念化し、抽象化する、これが長所である。これを日常生活の上に利用すると、すなわち工業化すると、大量生産となる。大量生産はすべてを普遍化し、平均にする。生産費が安くなり、そのうえ労力が省ける。しかし、この長所によつて、その短所が補足せられるかは疑問である。すべ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

て普遍化し、標準化するということは、個個の特性を滅却し、創造欲を統制する意味になる。それから「ドゥー・イット・ユアセルフ（自分でやりなさい）」式の未完成家具や小道具類ができて、それがかえって、今まで省けた労力を消耗することになる。ある意味で創作力の発揮になるものが、きわめて小範囲を出ない。つまりは機械の奴隷となるにすぎない。思想面でも一般化・論理化・原則化・抽象化などということも、個性の特殊性、すなわち各自の創作欲を抑制することになる。だれもかも一定の型にはまりこんでしまう。どんぐりの背くらべは、古往今来、どこの国民の間にも見られるところだが、知性一般化の結果は、凡人のデモクラシーにほかならぬ。東洋民族の間では、分割的知性、したがって、それから流出し、派生するすべての長所・短所が、見られぬ。知性が、欧米文化人のように、東洋では重んぜられなかったからである。われわれ東洋人の心理は、知性発生以前、論理万能主義以前の所に向かつて、その根を下ろし、その幹を培うことになった。近ごろの学者たちは、これを嘲笑せんとする傾向を示すが、それは知性の外面的光彩のまばゆきまでなるに眩惑せられた結果である。畢竟するに、眼光紙背に徹せぬからだ。

（鈴木大拙「東洋文化の根底にあるもの」）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

われわれは今日書物の氾濫している社会に生きている。書物に対して何の不思議も感じはしない。それは当り前の存在なのである。しかしそれが出はじめた頃には、人びとはプラトンと同じように、それとうさんくさい存在として、疑惑の眼をもつて眺めていたのではないかと思う。そしてそこに批評されている点も大いに当るところがあるとも考えられる。わたしたちは著者の講演などを直接聞くことによつて、その著書に言われていることを、何とはなしに全体的にわかつたと思うことがある。つまり直接に理解することができたことを、読書によつて思い出すことができるわけであつて、それは読書だけでは経験できなかつたことだとも考えられる。また実際の書物、例えば料理法とか礼儀作法の書物、あるいは工業技術や経営の実務に関する書物、更に一般的に理科関係の書物には、プラトンの指摘したような書物の二次的、副次的な役割というものがひろく認められるように思われる。実験室や研究室の仕事が主たるべきものであつて、その記録はただ後日メモとして用いるためであり、雑誌なども他人の行つた実験や観察の記録を見るためのものであると言わなければならぬ。だから、自分で実験なり、観察なり、あるいはモデルづくりをしているのでなければ、素人にはまったく寄りつくところもない、閉ざされた書物になってしまう。もしまったくの素人が、そういう記録を読んで、自分だけの空想によつて何かわかつたようなことを言つても、そのようなに世知識人は、専門家から冷笑され、黙殺されるだけだろ

う。書物は既に知っている人にしか役に立たないという、プラトンのパロクスめいた主張は一つの真理であると言わなければならぬ。

しかしながら、ギリシア神話で言えばプロメテウスの贈物である文字の発明を、このようにただ否定的にだけ考へてしまうのは、やはり一面の真理に止まると言わなければならないだろう。現在はラジオやテレビの発明と発達によつて、また再度むかしのギリシア人が親しんでいたようなレトリックの復活が見られることになった。演技用の微笑まで用意して、健康によいかどうか疑わしいお菓子の宣伝をする男が、苦い薬をのむことをすすめる医者の手な演説を圧倒して、大衆の指導者となる時代が来たのである。デマゴギーというのは、ギリシア人のことばなのであるが、意味は大衆迎合の演説ということである。

今日のいわゆる開発途上国社会に見られる独裁者革命は、ほとんどが文字を知らない人たちばかりの国において、ラジオや拡声器を通じての、デーメーゴリアー（大衆迎合の演説）を最大の武器としている。大衆民主主義社会における独裁者の出現という、すでにプラトンが予見していたパロクスは、「はなしことば」の第一次的な応力の利用に大きく依存していると言ふことができるだろう。ヒットラーはそれのお手本みたいなものである。このようなレトリックに対して、われわれはディアレクティック（問答法）というものを対立させたのであるが、また別の観点からすれば、文字と書物がこれに対立すると言ふこともできるだろう。演説はその場かぎりのものであつて、われわれも感情の弱味をおさえられると、普段の判断力も狂つてしまつて、とんでもないことを信じこまされることがある。だから、後でまた気が変るといふことも起る。それを防ぐために、覚書きといふものがつくられたりする。文字は一時のものではなくて、一種の恒久性をもっている。それは何度もうりかえして読むことができる。一時の感激ではなくて、冷静な判断の余裕をあたえてくれる。

（田中美知太郎『学問論』）



「善」と「悪」とにはいくつもの基準がある。その基準のひとつに変化スピードがあるといってもよい。たとえば二千年くらいをかけた、日本から稲作が^{いなさく}一掃された^{いっそう}としよう。このケースではおそらく問題は起こらない。なぜなら二千年という長い時間のなかで、新しい日本の食文化が生まれ、農村でも稲作に代わる農業体系やそれに適応した村がつくられているだろうからである。ところが五、六年で稲作を一掃したらどうなるだろうか。この場合は私たちの食生活も、外食産業や流通、小売業も、大混乱に陥るであろうし、農山村では破滅的な事態が発生するかもしれない。

たとえ同じ内容のことが実現されたとしても、変化を受け入れ、対応していけるだけの時間を保障した変化とそうでないものとは、決定的な違いが^{ちが}発生していくのである。そしてこのことは、地域を考えるときの重要な要素でもあると私は思っている。

かつて、多くの人々が、自分たちは地域とともに暮らしていると感じていた頃、その地域はゆるやかな変化とともに展開していた。祖母が生きたように父母が暮らし、父母が生きたように子どもたちが暮らす。そんな一面が農山村でも都市でも展開していた。もちろんどんな時代にも変化は生じていただろう。だがその変化は、自然や人間が対応できないほどには速くなく、その結果、変化によってこわされていくものより、時間のなかで蓄積されていくもののほうが多かった。だからこそそれぞれの地域に、その地域の自然の利用の仕方や、その地域の方言、食文化、祭りや行事のかたち、地域の人々が大事にした作法や文化が生まれていった。そして人々は、この地域に「自分たちが存在する場所」をみいだした。

ところが現在では、地域は衰弱^{すいじやく}している。都市では、人間たちが住んでいる空間はあっても、地域が存在しないというような状況も生まれている、地域をつくりだしていこうとする試みが繰り返^{かえ}しおこなわれているにもかかわらず、である。

それは現代の社会が、地域が生まれていく時間を保障しえないかたちで、変化を進行させてしまうからである。街の景観も、そこに住んでいる人々も、生活のかたちや労働のあり方も、ものすごいスピードで変わっていく。これでは地域らしさが形成されていく時間が確保できないのである。

とすると次のような結論が生まれることになる。私たちは「地域

的な空間」の激しい変化を受け入れながら、そこに地域らしい地域をつくろうとすれば、自己矛盾に陥^{おちい}ってしまう。少なくとも残された自然の姿、そこに住む人々、基本的な景観、生活や労働、地域文化のかたちといったものが、ゆつくりとしか変わらない社会をつくらないかぎり、安らぎを感じるような地域は生まれてこない、ということになる。

（内山節『風土と哲学―日本民衆思想の基底へ―第八十二回』
信濃毎日新聞、二〇〇八年七月十九日。）



一方、生き残る方言には、二種類のものがある。ひとつは、それが方言だと気づかれないで使われる方言である。例えば、東北地方では「捨てる」ことをナゲルと言う。「テレビをナゲル」は、テレビを放り投げるわけではなく、廃棄する（はいき）という意味である。このように、意味はずれるものの形が同じことばは、共通語と錯覚（さくかく）されるために残りやすい傾向がある。しかし、それらは方言だと気づかれたが最後、共通語へ切り替えられていく運命にある。

生き残る方言のもうひとつは、方言だとわかつてはいるが、使わないではいられないといったものである。それらは、文末詞や、感情語彙（こい）、程度副詞、挨拶（あいさつ）ことばなどの中に多い。例えば、仙台の文末詞なら「行くつチャ」の「チャ」がよく使われる。これは共通語に直せば「行くさ、行くとも」であり、「当然（たうぜん）だろ、何でそんなこと聞くん（きこ）だ」といったニュアンスを表す。また、「行くべ、行くべ」は、「行こう、行こう」という意味で、相手を誘う（さそ）ときによく使う。こういった「チャ」や「べ」は今でも元氣である。

感情語彙（こい）では、「メンコイ」や「イズイ」が生き残っている。「イズイ」は体表面のなんとも言えぬ不快感を表すもので、襟元（えりもと）に毛が入って「イズクてたまらない」とか、セーターを洗ったら縮んでしまったって「イズクてしょうがない」といったふうに使われる。こういう方言は、今でも老若を問わず根強い人気（にんき）があつて、かなり使われている。気づきにくい方言と違い、これらこそ地元の人々の支持を得た、真正正銘（しやうしんしょうめい）生き残る方言といえる。

これらの「真正」生き残る方言に共通するのは、いずれも相手の感情（こころ）に訴えかける性質を持つという点である。右で見た文末詞や感情語彙（こい）はもちろん、程度副詞（かんせいのふしじ）（関西のメチャ、名古屋のデラなど）や挨拶（あいさつ）ことば（東北のオバンデス）も、同様に理解してよいだろう。これらの感情的要素は相手の心に響く（ひびく）ものだけに、会話の雰囲気（ふんいき）を気取らない、打ち解けたものにする効果が抜群（ばつぐん）である。すなわち、こうした方言を使うことで、「私はあなたと心を割って、親しく話したいんだ」とか、「肩肘張（かたひじ）らないで、リラックスして話しましょうよ」といった意思表示を行うことができる。共通語の使用が相手との間に壁（かべ）を築くのに対し、これらの方言は逆にそのよう

な垣根（かきね）を取り払い、お互い（たが）の心的距離（きんきょり）を縮める役目を果たす。現代人は無意識（むいしぎ）のうちに、こうした方言の機能を会話のストラテジーとして利用しているように見える。

「方言」と一口に言っても、もはやそれはシステムではなくスタイルに変質（へんしつ）してしまつた。それならば、方言スタイルという確固（こくこ）とした文体（ぶんたい）が存在（そんざい）するの（？）かといえ、若者（わかもの）たちの方言の実態（じたい）は、共通語が主体（たい）でそこに右に見たような要素（ようそ）をわずかに加えた程度（ていど）のものにすぎない。会話の雰囲気（ふんいき）作りのために共通語に散りばめられる要素（ようそ）になつてしまつた方言を、私は、服飾（ふくしやく）になぞらえて「アクセサリー」としての方言」と呼ぶ。アクセサリーはあえて付ける必要（ひつや）のないもので、それを付けることには積極（きふく）的な意味（い）がある。同じように、若い人（わかひと）たちは共通語（こふんご）だけで十分（じゅうぶん）コミュニケーション（コミュニケーション）が成（な）り立つのに、あえて方言（ひょうげん）を使おうとしている。それは、親しい仲間（仲間）同士の会話を（か）を楽しむ潤滑油（じゆんかつゆ）として、方言（ひょうげん）の価値（かち）を認（め）めているからには（？）かならない。

ところで、アクセサリー化したといつても、仙台（せんだい）あたりの若者（わかもの）が使う方言（ひょうげん）はあくまでも地元（じよん）の方言（ひょうげん）である。ところが、最近（さいきん）では、東京（とうきやう）の若者（わかもの）たちが、全国各地（こくさい）の方言（ひょうげん）を取り込んで携（け）帯（たい）メール（メール）を楽（たの）しんでいるという。正直（こくせき）、方言（ひょうげん）がここまでくるとは思（おも）わなかつた。考（かん）えてみれば、こうした無国籍（こくせき）的な方言（ひょうげん）の使（つか）い方は、アクセサリー化した方言（ひょうげん）の究極（きうごく）の姿（すがた）であると言（い）えるだろう。だが、土地（ち）から遊離（ゆうり）した方言（ひょうげん）は果たして方言（ひょうげん）と言えるのか。「母（はは）なることば」「方言（ひょうげん）」というイメージ（イメージ）にとらわれて（？）いると、蕎麦（そば）の薬味（薬味）のような方言（ひょうげん）を方言（ひょうげん）と認（め）めるには抵抗（ていこう）がある。「方言（ひょうげん）」とは何（なん）であるのか、自明（じめい）のように思（おも）われたことが、今（いま）、あらためて問（と）われて（？）いるのである。

（小林隆（たかし）「現代方言の正体」による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

しかし人間というのは気まぐれなもので、人間の遊びは、決して玩具によって百パーセント規定されるものではないのである。これは大事なことだと思ふので、とくに強調しておきたいが、玩具のきまりきった使い方を、むしろ裏切るような遊びを人間は好んで発明する。そもそも遊びとは、そういうことではないかと私は思うのである。たとえば、汽車や自動車の玩具があつたからといって、私たちはそれを必ずしも汽車や自動車として用いるとはかぎらない。もし戦争ごつこをやりたいと思えば、その汽車や自動車を敵の陣地として利用するかもしれないし、お医者さんごつこをやりたいと思えば、それを医療器具として利用するかもしれないのである。玩具がいかに巧妙に現実を模倣して、子供たちに阿諛追従しようとも、子供たちはそんなことを屁とも思わず、平然としてこれを無視するのだ。

すべり台は、必ずしもすべり台として利用されはしない。私の家にも、かつて屋内用の折りたたみ式の小さなすべり台があつたものがあるが、私はこれをすべり台として用いた記憶がほとんどない。あんなことは、子供でもすぐ飽きてしまうのである。私の氣に入りの遊び方は、すべり台のすべる部分と梯子の部分とをばらばらに分解して、すべる部分を椅子の腕木の下に通し、それとT字形に交わるように梯子を設置して、飛行機をつくることだった。飛行機ごつこをすることだった。つまり、すべる部分が翼であり、梯子の部分が胴体なのである。梯子には横木がいくつもあるから、そこに腰かければ数人の子供が飛行機に乗れるのである。このアイディアは大いに氣に入つて、私はすべり台を私の飛行機と呼んでいたほどだった。ボードレールにならつていえば、「座敷の中の飛行機はびくとも動かない。にもかかわらず、飛行機は架空の空間を矢のように速く疾駆する」というわけだ。

子供たちはしばしば、玩具の現実模倣性によつて最初から予定されている玩具の使い方とは、まるで違う玩具の使い方をする。もう一つ、私自身の経験を語ることをお許しいただきたい。私は三輪車

をひっくりかえして、ペダルをぐるぐる手でまわして、氷屋ごつこをやつて遊んだことを覚えてゐる。いまは電氣で回転するらしいが、かつては氷屋では、車を手でまわして氷を掻いたのである。

ここで、この私のエッセーの基本的な主題というべきものを、ずばりといつておこう。すなわち、玩具にとつて大事なものは、その玩具の現実模倣性ではなく、むしろそのシンボル価値なのである。この点については、いくら強調しても強調しすぎることはない。玩具は、その名目上の使い方とは別に、無限の使い方を暗示するものでなければならぬだろう。一つの遊び方を決定するものではなく、さまざまな遊び方をそのかすものでなければならぬだろう。すべり台にも、三輪車にも、その名目上の使い方とは別に、はからずも私が発見したような、新しい使い方の可能性が隠されていたのだ。つまり、これらの玩具には、それなりのシンボル価値があつたということになるだろう。

私の思うのに、玩具の現実模倣性とシンボル価値とは、ともすると反比例するのではあるまいか。玩具が複雑巧緻に現実を模倣するようになればなるほど、そのシンボル価値はどんどん下落するのではあるまいか。あまりにも現実をそっくりそのままに模倣した玩具は、その模倣された現実以外の現実を想像させることが不可能になるだろうか。その名目上の使い方以外の使い方を、私たちにそのかすことがないだろうからだ。そういう玩具は、私にはつまらない玩具のよう

（澁澤龍彦「玩具のシンボル価値」より）



のび太の孫の孫のセワシ君が、未来の世界からタイムマシンでやってくる。ところから、このお話は始まっている。ドラえもんとは何か。それは、のび太の残した借金が多すぎて、百年たつても返しきれないセワシ君が、どじなのび太の運命を変えようとして、現代に送り込んだロボットである。だから、ドラえもんがなすべき仕事は、当然、のび太を援助して、その悪い運命を改善することである。

しかし、考えてみれば、ドラえもんのおかげでのび太の運命が改善されてしまうと、セワシ君がのび太によって受けた被害もなくなってしまう。彼がドラえもんを送り込んだ理由そのものが消えてしまう。

そのとき、のび太の借金のせいで貧乏だったセワシ君は、いったいどこへ消えてしまうのだろうか。そして、ドラえもんがいまのび太の家にいるその原因そのものが消えてしまってもなお、ドラえもんはそこに存在していられるのだろうか。

そう考えると、ドラえもんとはきわめて不思議な存在であることがわかる。彼は、いま自分がそこに存在している原因と、その存在理由そのものを、消し去るために存在しているのだから。自分の存在理由を消し去ることがその存在理由である存在！彼が少しでも内省力のあるロボットなら、ある日そのことに気づいて、「ぼくっていったい何のために存在しているのだろう」という実存の不安に襲われるはずである（実際にはそんなようすはまったく見られない。のび太ほどの思索力もない、能天気なやつなのである）。

いや、そうではなく、この話には論理的な矛盾が内在しているのかもしれない。ドラえもんとは、そもそも不可能な存在なのかもしれない。『ドラえもん』の世界は二つの矛盾した事態の成立を主張している。ドラえもんの援助を受けないのび太と、ドラえもんの援助を受けているのび太。借金で首がまわらないセワシ君。等々。この矛盾をどう考えたらよいだろうか。

（中略）

それを変える？ そうだ、とセワシ君は言うであろう。ぼくはこの境遇を変えたいんだよ。ぼくは、自分が幸福になりたいから、この不幸の原因を取り除いているんだよ。

しかし、借金で首がまわらないセワシ君の境遇は、もう実現してしまっているのだ。ここで、第四の可能性が考えられる。セワシ君が大借金をしている世界と、セワシ君が借金などしていない世界とは、二つの別の世界なのだ、と考える可能性である。しかし、もしそうだとすると、セワシ君もまた二人いることになるから、貧乏だったものとセワシ君自身の境遇はちつとも改善されないことになる。ドラえもんの活躍のおかげで、どこかの世界に裕福なもう一人のセワシ君が存在するようになって、自分自身の運命はぜんぜん改善されないのだ！

（永井均『マンガは哲学する』による）



たしかに「解放」された旧植民地の人びとにとって「自由」は新しかった、しかもまったく「新し」かったことだろう。というのも、彼らにはかつて一度も「自由」の経験などなかったのだから。その地に「ヨーロッパ」が訪れ、この「文明の中心」に鎖で繋がれる以前には、彼らには彼らなりの自在さがあつたとしても、「自由」など必要なかったことだろう。彼らはいわば自生していたのであり、「独立」を主張する必要も「解放」される必要もなかったはずだ。植民地支配によつてこれらの地域は、輝かしい発展を謳歌する西洋近代の黒いエクス・マキナとして、その「進歩と繁栄」に繫縛され搾取されたのだ。とはいえ彼らは独立によつてけつして「解放」されたわけではない。なぜなら「独立」とは、すでに不可逆的に進行している西洋的歴史のなかで一主体としての承認を求めることであり、彼らが「解放」される空間は、すでに西洋化した世界空間なのだから。そこに「主体」として参入するために、彼らは結局あらためて「西洋システム」という学校に入り、それこそ未知の「自由」を学ばなければならなかったのだ。そのことが現在の世界のいわば既決性というものを端的に示している。

ヨーロッパは世界化し、世界はヨーロッパ化した。というより、この世界はヨーロッパによつて世界として形成された。そしてヨーロッパは自己の普遍性の主張を、形成された世界との内に実現することになった。ただ、この普遍性の実現が全体としての世界との形成として成就したのは、この世界が地球という球体の表面にあるという単純な物理的条件に規定されている、ということには注意しておいてよい。でなければ、普遍性の主張が全体化として実現されるということとはありえない。どんなにヨーロッパが膨張しても、それが無限の平面上のことだったら、その普遍性の主張も有限な領域に甘んじるひとつの普遍性にすぎず、膨張の前線の向こうにはつねに未知で手つかずの圏域が広がっているからだ。その外部が、拡張するもの自身をつねに個別性へと送り返す。ただ地球が丸いということが、前線の解消と全体化を可能にするのだ。ヨーロッパ

ッパはそのようにして全体となった。

だがすべてがヨーロッパ化してしまったとしたら？ ヨーロッパが拡張を続けている間は、つまり同化する外部をもつ間は、ヨーロッパは有限な、したがって固有性をもつものでありえた。ただその境界がなくなり、すべてがヨーロッパ化されて全体がヨーロッパ的になってしまつと、ヨーロッパはもはやその固有性を主張しえなくなる。あらゆる差異を超える共通項、全体の全体性たる所以をなすものは、この全体の内でのいかなる固有性ももたない所与の条件である。いまヨーロッパはそのような世界の全体性の自明の条件になつてしまった。だからこそ、世界のどこにいても「世紀末」を語つて何の違和感もないのである。「西暦」は依然としてこの世界の世界性形成の刻印だとしても、もはや個別ヨーロッパへの帰属という意味を失つてしまつていく。そして実はそれが現在の状況の象徴的な反映なのである。だからいま「歴史の終り」が語られるとしても何の不思議もない。たしかに歴史は終わったとも言える。だがその「終った歴史」とは、歴史一般ではなく西洋を主体とする世界化の歴史なのである。

(西谷修『世界史の臨界』による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

生産性向上を目指してきた近代社会は、機械化と時間管理の徹底化によって単位時間当たりの生産性を高め、一日、一週間、一月、一年といった各周期の労働時間の短縮を行なってきた。一九八八年、労働基準法の改正により、日本でもようやく週四〇時間を目指して労働時間の短縮を図る動きが国の側から開始された。いまだに実質的に週四〇時間労働が実現しないとはいえ、自由時間の増大に対応するための社会システムのあり方が模索されている。そこで目標とされるのは年間で一八〇〇労働時間の社会であり、睡眠時間や通勤時間を除いても年間の自由時間は約四〇〇〇時間となる。さらに、圧倒的に多い自由時間は、人生全体のなかで大きな比重を占め、人びとは自由時間の過ごし方を中心に人生の設計を図らなければならない。

しかしながら、近代社会の理念の下では、けっしてこの自由時間は個人の自由に完全に委ねられるわけではない。それは、自由裁量の時間でありながら、労働や他の義務的活動によって生じた疲労を回復し、気晴らしになり、しかも自己の発展と文化の発展につながるような活動で埋めることを求められる。享楽主義や自己破壊につながるような時間の過ごし方は、近代の理念に反するのである。その意味で、レジャーは、新しい時代の社会規範にしたがって水路づけられることになる。

他方で、自由時間の過ごし方は、時間をあくまで定量的に把握する近代の時間観念に依拠している。労働時間が資源として扱われ経済的価値を帯びるにつれ、それを切り詰めることによって獲得された自由時間にもその経済的価値意識が反映されてくることは、必然の成り行きでもある。すなわち、自由時間を有効に無駄なく過ごすという意識が、自由時間内の活動自体に浸透するのであり、近代の時間意識は、自由時間においても変わらない。複数の人びとが共同で行なうレジャー活動は、多くのスポーツや趣味のクラブや個人の日常の各周期のスケジュールのなかで、厳格に共時化され、順序づけられ、進度調整が図られる。

しかし、時間を合理的に使うとする割には、自由裁量性に目を奪われたり期待をかけすぎて、われわれはすべての活動が時間を消費することを忘れがちである。たとえば、テレビの番組をビデオに

収録して自分の好きなときに見るといふ発想は、時間消費の自由裁量性を高める工夫であるように見える。しかしこれは、今は読めないがいつか読むつもりでたくさんの本を買い込む悪癖を想起させる。現実には、それは限られた自由時間にきわめて時間消費量の多い活動を詰め込み、結局睡眠時間を切り詰める結果になりがちである。この傾向は、消費社会の論理によってさらに加速される。

（長田「攻」『現代社会の時間』『岩波講座現代社会学 時間と空間の社会学』岩波書店、一九九六年による）



ウェーバーは、十九世紀ロシアの文豪、トルストイに非常に注目して、合理化の問題を考えるときにトルストイにたびたび言及しています。

そのトルストイの『人生論』の中にこんなエピソードが紹介されています。

あるところに水車小屋で粉ひきをしている男がいました。彼は自然の恵みの中で朝から晩まで一生懸命働いていたのですが、あるとき水車のメカニズムに興味を持ちます。そして、水車が引きこまれてきた川の水によって動いていると理解すると、今度は川の研究に熱中してしまい、気がついてみれば、本来の仕事である粉をひくことを忘れてしまっていた——というものです。

トルストイのテーゼは徹底的に「反科学」です。科学はわれわれが何をなすべきかということについて何も教えてくれないし、教えてくれないばかりか、人間の行為がもともと持っていた大切な意味をどんどん奪っていくと考えました。

漱石も彼らとまったく同じことを言っています。

「野蛮時代で人のお世話には全くならず、自分で身に纏うものを捜し出し、自分で井戸を掘って水を飲み、又自分で木の実か何かを拾って食って、不自由なく、不足なく、不足があるにしても苦しい顔もせずに我慢をして居れば、……生活上の知識を一切自分に備えたる点に於て完全な人間と云わなければなりませんまい」（講演『道楽と職業』）

だからと言って、漱石もウェーバーも、進んでいく時代の流れには抗えないと考えていました。ウェーバーの言葉を借りれば、「認識の木の実を食べた者は、もう後には戻れない」のです。

このような中で、私たちはどのような知性のあり方を信じ、あるいは選びとっていったらいいのでしょうか。

人類学者のレヴィ・ストロースが言う「ブリコラージュ」的な知の可能性を探ってみることで、ブリコラージュとは「器用仕事」とも訳されますが、目前にあるありあわせのもので、必要な何かを生み出す作業のことです。私はそれを拡大解釈して、中世で言うクラフト的な熟練、あるいは身体感覚を通じた知のあり方にまで

押し広げてはどうかと考えています。

科学万能の流れの中で、迷信や宗教などは駆逐されていきましたが、それらは完全に消えたわけではなく、ニッチエ的に言うところ「背面世界」となっている。この世の片隅にちりばめられて残りました。その中に「土発的」な知（自然の移ろいの中に生きて、そこから発するような知）の伝統がささやかに息づいていました。

それらは一時絶滅寸前までいったのですが、いままた少しずつ見直されているような気がしています。

じつは、このことを考えるたびに、私は自分の母のことを思い出します。母は、言わば前近代的な宗教の伝統や習慣を守って生きていた人でした。四季の行事、歳時記的なこと、人の生き死に、成長、衰退への考え方など、そのありようはまるで旧暦の世界のようでした。驚くべきことに、それは循環を繰り返している自然の摂理とぴったり一致していました。ですから、人間が本当に知るべきことは何なのかを考えると、そこにもヒントがあるような気がしています。

（姜尚中『悩む力』による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「何もない空間」を、意味に満たされた、懐かしい場所へと転換するためには、何が求められるか。それは角度を変えれば、みずからが土地の主役となつて、風景をとりもどす戦いでもある。いくつかの必要條件がある。たとえば、記憶の掘り起こし、物語の復権、あらたなる名づけ、といったものだ。飛躍を承知でいっておけば、世界遺産にたいする、ひとつの抵抗の試みとして、そこに地域遺産が浮上してくるはずである。

ここで、わたしはいささか唐突に、宮沢賢治という作家を思い出す。賢治が創つてみせたイーハトヴ世界とは何であつたのか。

イーハトヴとはあるいは、「何もない空間」としての、より生々しくは、冷害と飢えにあえぐ、貧しく暗い、「大根をかじる少年」や「娘たちの身売り」に彩られた岩手県を、まぼろしの理想郷へと、劇的にひつくりかえすための魔法の呪文であつたのかもしれない。

賢治はたぶん、空間の場所化のために、きわめて自覚的な

イーハトヴ戦略を選び取っている。第一には、記憶の掘り起こしであり、老人たちから聞き書きをおこない、昔からの暮らしと生業、伝承などを取材している。第二には、土地の名づけをおこなつて、たとえばイギリス海岸、なめとこ山など、風景にあらたな意味づけをあたえる試みを重ねている。そして、第三には、物語の創造であり、数も知れぬ、土地につながる物語を草稿としてではあれ残した。イーハトヴという名付けど、そこに生まれた物語の群れを思えばいい。賢治がおこなつた山野の彷徨は、「詩的な場所」を探すための旅であつたのかもしれない。

賢治の人生は、あきらかに挫折と失敗の連続であり、それは結核によつて早くに閉ざされた。いま、賢治の童話とイーハトヴに惹かれて、毎年、数百万人の観光客が岩手を訪れる。すくなくとも、死後の賢治はその土地に、莫大な経済効果をもたらし、多くの人びとが恩恵をこうむっている。「何もない空間」としての岩手を、東北を、まるごとイーハトヴという名の「詩的な場所」に仕立て直す、賢治の壮大な実験は、成功したのかもしれない、そんな感慨に打た

れるのである。

グローバル化の時代である。アメリカという「帝国」を基準とした、均質化の暴力が、世界をかぎりなく金太郎アメ化してゆく。それはある側面では、避けがたい流れであるのかもしれない、しかし、その負の側面が大きくせり出つつある。グローバル化なるものが、さまざまな民族・国家・地域がもっている個性や、内発的な力を削ぎ落とす方向へと働くことは、否定すべくもない現実である。だからこそ、ほんとうの幸福とは何か、という時代錯誤な問いにたちかえる必要がある。逆説的に、自分（国家・民族・地域）とは何か、という問いが浮上してくるのも避けがたい。グローバル化の時代は、その裏返しのように、地域の時代のはじまりをもたらすにちがいない。そうして、地域のアイデンティティの模索がはじまる。土地の記憶の掘り起こしが必要となる。個性的な顔をもつた地域を、いかにデザインするか、演出するか、それがあつた種の普遍性を帯びた問いへと成り上がるのである。

（中略）

それぞれの地域の歴史・文化・風土の読み直しをもとに、地域的なアイデンティティの模索をおこなうなかに、しだいに「地域遺産」が姿を現わしてくるだろう。それは神のごとき絶対の他者が、外から認定するものではない。地域に生きる人々が、みずからの幸福のために求め、みずからの意志で選び取るものである。みずからの「かけがえない風景」を大切に思う心こそが、異質な他者を許し、異質な文化や民族や宗教をあつたままに認め、ともに生きる寛容の精神を育むのではない。多神教の風土が秘める力を信じたい。

（赤坂憲雄「地域遺産とは何か」による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

最後に、現代日本における「宗教性」の行方について、簡単な予想図を描いてみよう。その予想図を描くに当たって、少し遠回りになるが、「宗教社会学」という学問の誕生当初のことを考えてみたい。社会学の鼻祖たるマックス・ウェーバーとエミール・デュルケームが、共に宗教社会学に多大な力を注いだのはよく知られているが、それは何故だろうか。言うまでもなく、近代化とはウェーバーからすれば「呪術の園」から脱却する過程のはずだが、よく見るとどうもそうではない。そして彼は、現在の西欧を中心とする資本主義社会の成立に、宗教、殊に禁欲的なプロテスタンティズムの「痕跡」が見られることを大胆に解き明かし、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を著した。この著でウェーバーは、宗教の持つ潜在的な「社会変革力」に注目した、と評せるだろう。一方、デュルケームの生きたフランスにしても、フランス革命からの激しい政治的変動を経つつも、なにやら社会の紐帯としての宗教の役割は消滅していないように見えただろう。そのような時代状況のもと、デュルケームは宗教が持つ「社会統合力」、社会的紐帯としての役割に注目し、『自殺論』や『宗教生活の原初形態』を著した。ウェーバーもデュルケームも、社会学という近代に誕生した学知の推進者であり、そのような「近代の子」だったが故に、却って近代社会に潜む「宗教性」を無視できなかったのであろう。彼らの主要業績に「宗教社会学」が鎮座しているのはある意味必然であった。まさに近代社会にとって「宗教」は、「変革」と「統合」の二つの間を揺れ動く「何か」であり、社会秩序を維持したい側にとつても、それを改革したい側にとつても、宗教は一方の特徴を強調され「ノイズ」化されたのである。このような「宗教」のありかたを、「まつろわぬもの（服従しないもの）」という用語で表現してみたいと思う。本稿では先程述べたように、現在まさに新たな「まつろわぬもの」として、医療現場において様々な「抵抗（＝宗教性）」が生じていることを明らかに

してきた。これはウェーバーが強調した宗教の「変革力」とまではいかないまでも、少なくともある流れに対して反省を促し、状況を変えるきっかけになるものであるとは評せよう。

（中略）

このような「まつろわぬものの声」を聞き続けること、自らの「宗教性」をノイズとして処理せずにある意味「飼ひ慣らす」こと。このような実践がこれからの我々の「スピリチュアリティ」の進展及び維持の最低条件ではないだろうか。現在の我々が頭を悩ませている「宗教」にまつわる諸問題——例えば「原理主義」の擡頭やカルト問題——は、これらの声を無視し続けた結果、その「声」に復讐されていることを象徴しているのではないだろうか。そして、「宗教」を理論的に考察する者も、以下のことを念頭に置かねばならないだろう。すなわち、ロマン主義的に「宗教」の変革力を称揚し過ぎず、かといってシニカルにその秩序の保持への寄与をあげつらうのでもなく、その往還に寄り添うようなポジションを保持することである。つまり宗教研究者は現代の「宗教性」を観察する時、その変革力に注目しようが、その統合力に注目しようが、ウェーバーとデュルケームの両者に同時に仕える一種の「訓誥学徒」たらざるを得なくなるだろう。そしてそのような態度こそ、最も「宗教性」に対して誠実な態度になり得るであろう。

（川瀬貴也「「まつろわぬもの」としての宗教」による）



思考は語りとは別だという考えは、言語をもつばら伝達的手段と見なす言語観によつても補強されよう。「きれいな夕焼けだね」と人に語るとき、まずわたしのなかに、きれいな夕焼けだという思いがあり、それを相手に伝達するために、そのような言葉を発したのだと考えられる。言語がもつばら自分の思考を相手に伝達するための手段だとすれば、思考は語りとは別であり、語りに先だつて形成されるということになる。

しかし、考えることは語ることと本当に別なのだろうか。語ることには先だつて思考が形成され、それをたんに日常言語で表現するにすぎないのだろうか。言葉を用いて考えるとき、まさに語ることとともに、思考が形成されているようにみえる。「今日は暑いな」と語るとき、そのときはじめて今日は暑いなという思考が形成されたのであつて、語ることには先だつてあらかじめそのような思考が形成されていたように思えない。もし語ることに先だつて思考が形成されていたとすれば、その思考は無意識の思考ということになるだろう。わたしが今日は暑いなと意識的に考えたのは、「今日は暑いな」と語ったときである。したがつて、それに先だつて、今日は暑いなという思考があつたとすれば、それは無意識的な思考にほかならない。

このような無意識的な思考が存在するかどうかという問題については、ここでは紙幅の都合上、扱わない。そのような無意識的な思考が存在するとすれば、それは語りとは別だといえるかもしれない。しかし、意識的な思考については、どうだろうか。わたしが今日は暑いなと意識的に考えるのは、まさに「今日は暑いな」と語るときである。この場合ですら、思考は語りとは別なのであるか。そうだとすれば、「今日は暑いな」と語ることとは別に、そしてそれと同時に、今日は暑いなという意識的な思考が形成されていることになる。しかし、「今日は暑いな」と語るとき、わたしの意識にのぼるのは、「キョウワアツイナ」という音声（声に出したものであれ、頭の中のものであれ）だけである。それとは別に、今日は暑いなという思考が意識に現れるわけではない。したがつて、思考が語りとは別だとすれば、ここでも思考は無意識的だということにならざるをえない。つまり、意識的な語りの背後に、無意識の思考が存在するということにならざるをえないのである。

結局、意識的な思考を認めようとすれば、言葉を用いて意識的に考えるとき、思考は語りにほかならないと考えるほかないであろう。「今日は暑いな」と語るとき、そう語ることが今日は暑いなと考えることであり、それとは別にそのような思考があるわけではないのである。「きれいな夕焼けだね」と人に語るときは、たしかに

そう語るまえに、きれいな夕焼けだという思いが形成されていよう。しかし、その思いが意識的だとすれば、それはわたしの頭のなかで「きれいな夕焼けだ」と語ること（つまり内語）によつて形成されたものにほかならないだろう。そうだとすれば、この場合も、きれいな夕焼けだという思いは「きれいな夕焼けだ」という内語にほかならないのである。

（信原幸弘「言語による思考の臨界」による。）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集1番「ラテン語で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 二元的世界とは、個の世界と多の世界が対立した世界である。

B 人間は、山を征服することはできるが、自分自身を征服することはできない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「ラテン語で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「ドゥー・イット・ユアセルフ」も、結局与えられた狭い枠内での創作に過ぎない。

B 東洋人は、分割的知性の短所を抑え長所を生かしてきた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「われわれは今日」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A プラトンのころの古代の人々は、書物というものはあまり信頼していなかった。

B 書物は既に知っている人にしか役に立たないというプラトンのパラドクスは現代の書物にもあてはまる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「われわれは今日」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 文字の発明を肯定的に生かすことによって、レトリックを復活させることができる。

B 文字化されていない言葉は感情に訴えかけることができるから判断力を奪うことがある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「『善』と『悪』とには」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 速すぎる変化が「悪」であるように、遅すぎる変化も「善」とは言えない。

B 人間が対応していけるぐらいの時間量を持つ変化は「悪」ではない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「『善』と『悪』とには」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 変化の量よりも蓄積されるものの量の方が大きいから文化が生まれる。

B 自分が変化しないのに地域を変化させようとするのは一種の自己矛盾である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「一方、生き残る方言には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「捨てる」という意味で「ナゲル」という東北地方の方言は独特なのでこれからも生き続ける。

B 標準語では表せないニュアンスを持つ方言は、標準語中では生き残ることができない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「一方、生き残る方言には」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 共通語に比べると方言は心の垣根を取り払う効果がある。

B アクセサリー化した方言は、その方言の土地を離れて東京でも使われるようになってきている。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「しかし人間というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現実を巧妙に模倣した玩具は、子供の想像力を枯渇させる。
B 筆者にとって、子供のころのすべり台をすべり台として使うのは面白いことではなかった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「しかし人間というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 玩具の価値は、その玩具で遊ぶ子供がどう使うかにかかっている。
B 玩具が現実そっくりになればなるほど、その玩具による遊びの幅が減る。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「のび太君の孫のセワシ君が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A のび太の孫の孫のセワシ君は、未来が変わると過去も変わるということを知っていた。
B ドラえもんは、のび太の運命を改善するために未来から送り込まれたロボットである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「のび太君の孫のセワシ君が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 筆者の言う論理的矛盾とは、既に過ぎ去った過去をさかのぼるという矛盾である。
B 借金をしているセワシ君と、借金をしていないセワシ君が別の世界で存在するということは論理的に矛盾しない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「たしかに『解放』された」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ヨーロッパに支配される前の旧植民地の人々は、独立した国家を形成していた。
B 植民地から解放されること自体が、西洋のシステムを承認することだった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「たしかに『解放』された」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 世界がヨーロッパ化されたあと、ヨーロッパは特殊なものではなくなった。
B 世界がヨーロッパ化した現在、ヨーロッパの歴史の終わりは、歴史一般の終わりでもある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「生産性向上を目指してきた」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近代社会における個人の自由時間は、有意義な自由時間であることが要求されている。
B 多くの人が自由時間も無駄なく過ごそうと考えている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「生産性向上を目指してきた」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 労働における時間意識は、レジャーにおける時間意識にも反映している。
B ビデオの登場によって、人間の自由時間は増大した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「ウェーバーは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■トルストイは、生活上の知識と学問的な知識は別のものだと考えていた。

1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「ウェーバーは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■人は、季節の行事を大事にすることによって、生活上の知識を身につけることができる。

1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「『何もない空間』を」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■賢治は、自分のふるさとを観光地として成り立たせるために土地の風景に新たな意味づけを与えた。

1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「『何もない空間』を」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■地域遺産とは、公的な機関が認定するものではなく、そこに住む人々が選ぶものである。

1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「最後に、現代日本における」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■ウェーバーもデュルケムも、ともに宗教の持つ反社会性に注目していた。

1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「最後に、現代日本における」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■宗教の持つ変革力を軽視することによって、原理主義の台頭を防ぐことができる。

1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「思考は語りとは別だという」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■語る相手が目の前にいないときでも、思考は生まれる。

1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「思考は語りとは別だという」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■語る前に、その語ることが相手にとってどう受け取られるかを判断するはつきりした意識がある。

1 ○ 2 ×

1～3月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF